

---

# アイシールド21 IF

霊解

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイシールド21 IF

### 【コード】

N9404N

### 【作者名】

霊解

### 【あらすじ】

もしセナが……

(前書き)

アイシールドを読んで適当に思いつきで衝動的に書いたものです。

それでよかったですらぶつぞ。

「セナツ!!」

ああ、どうしてこうなったんだろう。

ただ、アメフトが楽しくて、それでやっと自分にも夢を見つげられて。

こんなに充実してたのに。

なんでこんな簡単に壊れてしまっただろう。

思い出すのは一か月前

部室を探していたら見つけた写真。

そこにはヒル魔さんと栗田さん、そして知らない二人が仲良く映っていた。

「あアン、んな写真まだ残ってたのかよ。ケケケ」

「うわあ、まだ残ってたんだ。もうとっくになくなってたものだと思っただよ」

二人に見せるとそれを懐かしむ目で見ていた。

きくとそれはアメフト部を設立したメンバーともうひとり後から入

部した人だったらしい。

「その人たちはどうしたんですか？」

「二人とも休部中」

「へえ、そうなんですか」

休部中ということはいつか戻ってくるってことだ。仲間が増えると聞いてぼくはうれしかった。

数日後

いきなり部室を開いて勝手に入ってくる人がいた。

「ひゃ〜、部室変わったね」

それは休部してるといった人のうち一人だった。

ヒル魔さんたちは喜んで。銃器がとにかく派手だったけど。

「へ〜、君が今のRB。悪かったね。どうせヒル魔が強要したんでしょ。」

「あ、いえ」

「大丈夫だよ。これから俺がちゃんとRBやるから。」

ただ問題だったのはその人がぼくと同じRBだったこと。でもぼくのほうが早かった。ぼくの居場所があった。

だけどぼくはその居場所を失う。

休日でも部活もなくして久しぶりに家族で車に乗って出かけた。

そして事故にあった。

次に目が覚めた時ぼくは病院だった。幸いぼくはそれほど大きなけががなく2、3週間で治るっていう話だった。

でもぼくは母さんを失った。

母さんがぼくを守ってくれたらしい。

父さんはまだけががしていてこん睡状態だった。

母さんの葬式などはすべて親戚の人がやってくれた。

気づいた時には一ヶ月たっていた。なにをやっていたかも覚えてない。

そこでふと気付いたんだ。アメフトにいかなきゃって。

何がそうさせたのかわからない。いままで忘れていたけど、もしかするとそれがぼくにとって救いになると思ったのかもしれない。母さんのことをあまり考えたくない一心でぼくは学校まで走った。

そしてそこで練習をした。

みんなどこかぼくに遠慮しながら。

でもなにかにうちこんでぼくは母さんのことを忘れようとした、父さんがいま仕事に打ち込んでいるように。

けれどそんなぼくは現実を突きつけられる。

「おい、糞チビ、まじめにやりやがれ、タイム5秒台だぞ」

「え？」

ぼくは全力で走った。4秒だいがでるはずなのに。なのに5秒台。いくらなんでもここまで落ちないはずだ。ぼくは毎日走っていた。そう、すくなくとも違和感はなかった。

もう一回計った。でも結果は変わらなかった。ヒル魔さんもきづいたらしい。

「あゝあ、もういい。」

「ま、待ってください」

「もういいって言うてるんだよ、糞チビ。お前は、もううちのRBを出さない。」

そう言われた僕は走り出した。そんな事実認めたくない。それだけは認めたくなかった。

ぼくはいつの間にか家についていた。

珍しいことに父さんも帰ってきていた。

「セナ、話があるんだ。」

そういつて父さんは話し出した。自分が転勤するということ。そしてぼくにどうするか

「一緒にいくよ」

それは多分逃げなんだと思う。でも、ぼくはそんなに強くなくて、それでいて唯一の武器もなくした。ぼくはここでは多分一人で生きられない。

そうしてぼくは父さんと関西に移り住んだ。

そして僕は近くの帝国学園に入った。  
なぜ編入出来たのかわからない。

そこは関西一のアメフト高校だった。

ぼくは迷いながらそこに入った。



最初は7軍だった。

でもかまわなかったどちらにしろ、ぼくは6カ月かん試合に出られない。

出られるのはクリスマスボールぐらいだろう。

そしてぼくは6ヶ月間でぼくは一軍まで上り詰めた。

ぼくの武器はそのスピードじゃない。すばしっこさだ。

元のタイムにはもどらなかつたけどどうにか4秒3までは出るようになった。

でもそれだけじゃない。ぼくは足さばきに磨きをかけた。だからぼくは一軍にいる。

8

そしてクリスマスボール。相手は泥門。

聞いた瞬間、ぼくは自分の鼓動が速くなるのを感じた。

別に復讐とか考えてない。そんなものぼくは持てない。でもすこしの意地はある。

だからぼくは勝ちたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9404n/>

---

アイシールド21 IF

2010年10月10日20時00分発行